

東京双松会会報

発行 東京双松会事務局 (中央印刷事務器株式会社内)
 TEL:03-3265-4858 FAX:03-3265-4859 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
 印刷 中央印刷事務器株式会社

『戦後70周年に思う』

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

今年には第二次大戦終戦から70周年の節目の年であり、安倍首相も戦後70年談話を発表されました。これにちなんで私も戦後の70年間を主に経済面から振り返ってみたい。10年ごとの区切りで日本経済にインパクトを与えた出来事を手掛かりに述べていこうと思います。そしてまた、今年には東京双松会が発足して、ちょうど60年目の節目の年にあたります。

60年前、1955年には自由党と日本民主党の保守合同がありました。これは、社会党の右派と左派の大合同を受けたものでした。当時、私はまだ小学6年生でしたが、担任の先生が素晴らしい方で折に触れ時事解説をしてくださいました。その日も、先生がやや興奮の面持ちで「保守政党が大団結して自由民主党というものができました」と語られ、私は当然その深い意味を理解することはできませんでしたが、政治的に大きな出来事があったのだと今でもくっきりと印象が残っています。あるアンケート調査によりますと、昭和20年代すなわち1955年までは実は再軍備賛成、憲法改正にも賛成がむしろ多数派だったそうで、私にとっては意外な事実でした。またこの年は、わが東京双松会が発足し、初会合が行われた記念すべき年でもあります。

その後、昭和30年代に入って世論は再軍備反対、憲法護持に変わり、経済成長の途を邁進することになりました。翌年の1956年から1973年までの17年間の経済成長率は実に平均9.1%に達するという高度成長を実現するに至りました。

次いで50年前の1965年には日韓外交正常化が実現しました。日本は無償援助3億ドル、有償借款2億ドルの政府資金に加えて民間借款3億ドルの計8億ドルを供与しました。この額は当時の韓国の国家予算のなんと約2.5倍に相当するものでした。そして、この資金を梃子にいわゆる「漢江の奇跡」を実現しました。当時、韓国の一人当たりGDPはわずか105ドルでしたが、現在の約26000ドルまで50年間で約260倍の高度経済成長を達成しました。

韓国は当時、アジアでも最貧国の一つと数えられていました。フィリピンは203ドル、中国は158ドル、パキスタン144ドルなどと比べても貧しい国で、現在の韓国の繁栄からは想像もできないことでした。

1975年、第1回の先進国首脳会議(サミット)がフランスのランブイエで開催され、日本は三木武夫首相が出席し、政治面でも国際的なリーダーに列するに至りました。しかし、裏腹に経済面では1973年の第1次オイル・ショックの影響で深刻な不況に陥り、高度成長期を過ぎて1974年から1990年までは中成長期となりました。この16年間は戦後経済成長の第2段階と位置付けられ、成長率はその前の第一段階の約半分の4.2%に低下しました。

30年前、1985年は9月22日に忘れもしないプラザ合意として先進5か国蔵相・中央銀行総裁会合(G5)で国際的な為替調整(円高ドル安へ調整)を行うこととなり、想像を超える速度で実行に移されました。その結果、円の対ドル為替は240円から120円へとおよそ2年余りの間に急速な円高が進みました。日本企業はこれに対応して海外へ拠点を移し、国内での設備投資を抑制する方向に動きました。

この頃のエピソードとして鮮明に記憶していることは、マレーシアに現地工場を設けた松下電器(現パナソニック)の現地生産額がマレーシアのGDPの1割に相当するほどであったことでした。こうしたアジア諸国への拠点展開などによりアジア諸国の

経済成長は加速し、日本が先頭で牽引し各国が徐々に経済成長を遂げていくという雁行形態論が実証された形となりました。

20年前、1995年は阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件などが起きましたが、経済では円高が対ドルで79.75円まで進み、ひと頃のピークに達した年であり、この流れの中で日本企業は堰を切ったように海外投資をさらに進め国内の産業空洞化が懸念されるに至りました。1989年のバブル経済崩壊を契機として経済の低成長化が始まり、1991年以降は戦後経済成長の第3段階とみなされ、経済成長率は僅か平均0.9%にまで落ち込みました。振り返ってみると「失われた20年」と呼ばれたこの長期にわたる経済低迷への対策として積極的な景気対策が採られた結果、予算規模が膨張し現在の1000兆円に上る政府債務の増加の端緒となりました。

10年前、2005年には日本の人口が1899年の統計開始以来はじめて自然減となりました。様々な将来予測のなかで最も確度が高いものは人口推計とされています。何十年も前から人口は減少すると予測されていましたがなんら有効な対策は採られず、日本はついに人口減少時代に突入してしまったこととなります。今後はいろいろな対策を講じ、2050年時点で1億人の人口規模を維持できるようにしていかなければならないと思います。この政府債務と人口減少が我が国の当面する最大の問題と言えると思います。

さて、以上の文脈から少しずれますが、戦後70年を通して眺めると日本は素晴らしいことを3つほど達成してきたと思います。一つ目は戦後の荒廃からの復興と高度経済成長、二つ目は高度成長に付随して生じてしまった環境汚染問題の克服、そして三つ目は長寿社会の実現です。

★さて、それでは、身近な鳥根県の話題にも触れたいと思います。経済産業省の最近の暮らしやすさについての調査では全国の1741都市の中で松江市がトップになりました。2位から4位も出雲市、江津市、米子市となり、上位10都市のうち7都市を鳥根県、鳥取県が占めました。適度な規模で生活の質が高いことと、大地震などの天災リスクが比較的に低いことなどが考慮されたようです。

男子テニスでは錦織選手の大活躍はご存知のとおりですが、女子でも開星高1年の細木咲良選手がフロリダのIMGアカデミーで行われたニックボロテリー・ディスカバリーオープン2015で優勝しました。将来はテニスといえば鳥根となるのではないかと楽しみです。将棋では里見女流名人が5月に3期ぶりに女流王位を獲得しました。2月に史上初の6連覇を達成した女流名人と合わせて2冠に再び咲いたわけですね。

また、松江城が国宝に指定されました。天守の国宝指定は63年ぶり5例目で、近畿以外の西日本では初めてだそうです。

われらが母校である松江北高校については、6月に開催された第53回鳥根県高校総体において男子総合、女子総合の両部門で一位となり、その結果、5年ぶりに24回目の男女総合一位を獲得しました。後輩諸君の活躍を大変うれしく思います。

(株式会社 商船三井 相談役)



平成26年度総会報告

平成26年10月18日(土)、アルカディア市ヶ谷(私学会館)において第59回東京双松会総会および懇親会が、母校、双松会、近畿双松会からの来賓を迎え盛大に開催されました。

常松治郎さん(H5年卒)の司会で始まった総会では、中村康一事務局長(S40年卒)の開会の辞に続き芦田昭充会長(S37年卒)が挨拶されました。その中で芦田会長は、日本経済は消費税増税や円安による輸入物価の上昇はあるものの、現在の円安水準であればメリットが大きい。日本の在外資産は円高により約180兆円を含み損を抱えていたが、最近の円安ではほぼ解消された。株価も回復しており今後設備投資の拡大も期待できる。一方で楽観できない問題として少子高齢化がある。このままでは労働人口の急速な減少を招き日本経済は縮小するリスクを抱えており、出生率アップの政策が喫緊の課題である……、と我が国経済の現状について分かり易くお話になりました。



泉雄二郎校長

続いて来賓の挨拶に移り、まず平成26年4月に河原先生の後任として着任された泉雄二郎校長(S50年卒)が登壇され、経済の成熟期に入ってから生まれ育った生徒たちが入学して来ていることや少子化により生徒数が減少傾向にあるなど、母校は大きな転換期を迎えようとしており、これに如何に対処していくかが私たち教員に課せられた任務である。校訓である「質実剛健」に重点をおいて生徒を指導していきたい……と話されました。

次に登壇された庄司肇双松会会長(S35年卒)は、母校の双松について、平成22年に植え替えた双松の1本が枯れたので、平成26年4月に双松の系統を引く若木を新たに植えた。これを機に双松会会員に松の木の保護育成や校舎周辺の緑の整備のための募金をお願いしたところ、目標の300万円に対して本日現在490万円の寄付が集まったことに謝意を述べられました。

来賓挨拶が終わったところで、中村事務局長より25年度の活動報告、高根護康さん(S55年卒)よりゴルフコンペ開催報告、前島紀夫会計担当(S38年卒)の収支報告、宮城由美子監事(S53年卒)の監査報告があり、満場一致で承認されました。

続いて、順天堂大学大学院客員教授の田平武医学博士(S39年卒)が「アルツハイマー病の早期発見、予防、治療」と題して講演されました。田平博士は長年にわたりアルツハイマー病の研究に携わり、特にワクチン開発の第一人者です。スライドを駆使して難しい問題を大変分かり易く説明され、参加者は興味深く真剣に聞き入っていました(講演の要旨は3頁をご覧ください)。

講演終了後懇親会に移り、山本善朗さん(S28年卒)の豪快な音頭で乾杯したあと食事を楽しみながら参加者は夫々に懇親の

輪を広げていました。最後に全員で「赤山健児の歌」「山脈浮かびて」を大合唱し、原靖雄副会長(S33年卒)の閉会の辞でお開きとなりました(総会・講演・懇親会の模様は東京双松会のホームページ《「東京双松会」か、<http://www.tokyo-soshokai.org/>》に詳しく掲載されています)。(文責・田中)

第三回、第四回「東京双松会ゴルフコンペ」

東京双松会では会員皆様の親睦を目的に、年3回程度、平日開催と週末開催を交互に開催しております。

* 第三回東京双松会ゴルフコンペ

平成26年12月13日(土)

太平洋クラブ成田コース(千葉県成田市)にて開催

11名(男性9名、女性2名)参加

優勝 芦田昭充(ベスグロ)

準優勝 楠井一膳

第三位 田中 稔

* 第四回東京双松会ゴルフコンペ

平成27年4月17日(金)

藤ヶ谷カントリークラブ(千葉県柏市)にて開催

8名(男性8名)参加

優勝 芦田昭充(ベスグロ)

準優勝 成瀬 祐

第三位 楠井一膳



第三回東京双松会ゴルフコンペ



第四回東京双松会ゴルフコンペ

以上、第三回と第四回の「東京双松会ゴルフコンペ」2大会を通して、芦田会長の2回連続ベスグロ優勝と、完全制覇となっております。

報告：コンペ幹事 高根護康(S55年卒)

講演

— 田平 武(第15期 昭和39年卒) —

■■平成26年度総会・講演■■■

「アルツハイマー病の早期発見、予防、治療」
 ～～早期発見なら、アルツハイマー・ワクチン
 (経口ワクチン) で改善できる～～

田平武さんは、順天堂大学病院などに勤めるかわら、松江観光大使と島根遣島使を買って出て、島根県と松江市双方のPRに活躍されています。老化が認知症の最大の危険因子とされるなか、経口ワクチンを用い、多くの患者さんに希望を与えられてきました。

講演はまず、松江市や島根県との関わり合いの深さを示すように、パワーポイントで「石見銀山 世界遺産」のスナップが映し出され、地下に眠る3700年前の縄文杉の話から始まりました(東京双松会のホームページに示してある、田平さんのPDFでは、1ページ目を参照して下さい。以下、参照1/30というように表記します)。

認知症の患者は、高齢者(65歳以上)の14.75%を占め、462万人が認知症(うち310万人がアルツハイマー病)に罹り、さらに400万人が軽度の認知障害(認知症予備軍)で、今や「認知症800万人時代」を迎えたとされる[2013年、厚生労働省発表](参照2/30)。認知症は、いったん獲得した知的機能が脳の障害によって持続的に低下し、そのため、家庭生活や社会生活に支障をきたすようになった状態を指し、人のお世話が欠かせなく、棄すらし飲み忘れるような状態になっていることで、単なる物忘れは認知症とは言わない。アルツハイマー病は、認知症を起こす疾患の代表的な症状だという(参照3/30)。

高齢者認知症の内訳は、アルツハイマー病、脳血管性認知症、その混合型の認知症が全体の約80%を占めるという。アルツハイマー病は、どうやって診断を下されるのだろうか。まず患者に対して、「今日は何曜日? 何年? 季節は?」や病院名を聞くなど、問診から始める。次いで、CTやMRI、SPECT(脳血流検査)などで判断していく(参照4/30)。

当初、「コリン仮説」によれば、アルツハイマー病に罹った大脳ではアセチルコリンという神経伝達物質が減少しているためだとされた。このアセチルコリンは、アセチルコリンエステラーゼによってすぐ分解されてしまう。そこで、コリンエステラーゼがつくられるのを阻止する「コリンエステラーゼ阻害剤」を使って、脳のアセチルコリンを増やすために使われたのが、アリセプトや、レミニール、イクセロンなどだ。だが、吐き気、嘔吐、不整脈などの副作用がある。これらは対症療法であり、根本的予防・治療薬ではない。

一方、シナプス蛋白質の複合体であるNMDA受容体が減ったり機能不全に陥ると記憶形成ができなくなる。これはグルタミン酸が過剰に産生されるとNMDA受容体が活性化しすぎ、過剰に興奮したりするため、そこにNMDA受容体拮抗薬を使えば、認知機能を改善し、過剰な興奮を抑えることができる。NMDA受容体拮抗薬としては塩酸メマンチン(商品名メマリー)を使うが、めまいや眠気を催す(参照

9/30)。

アルツハイマー病の脳には、アミロイドβ(ベータ、Aβと略記)と呼ばれる蛋白からなる老人斑とタウ蛋白質からなる神経原繊維変化がたくさん出現し、そのため神経細胞が脱落し、認知症が起こるとされる。シナプス(脳の神経細胞)結合が消失し、いわば「窒息」させて認知症を起こすとされる。ただ、これらの物質がなぜ脳に溜まるのか、よくわかっていない。

アミロイド蛋白は加齢とともに脳で分解できなくなり、固まると毒性を持ちシナプスを壊し、老人斑を作る。タウ蛋白も、同じような経過で神経原繊維細胞を変化させる(参照11/30)。

そこでアミロイドβを取り除くワクチンの開発が進められている。アルツハイマーに罹ったマウスをアミロイドβで免疫すると、老人斑が消失し、学習障害が改善された(1999～2000年、Schenkら)。ただこのワクチンをヒトに用いると、10～20%のヒトに脳炎が発症した。けれどもワクチン接種により、ヒトでも老人斑が消えた。そのため今では、副作用のないワクチンの開発競争が世界で活発に進められている(参照12/30)。

「経口ワクチン」は、アミロイドβを除去するために開発された。まず、アミロイドβ蛋白を作る遺伝子をアデノ随伴ウイルスベクターに感染させ、このワクチンを口から飲む。すると腸管上皮に感染し、そこで作られたアミロイド蛋白に対して免疫系が反応し、抗体が上がる(免疫細胞が活性化される)。その抗体が脳に運ばれ、アミロイド蛋白オリゴマーに結合し、アミロイドβを除去するという仕組みだ(参照14/30)。ワクチンを老齢の猿に用いたところ、脳炎などの副作用は見られず老人斑は除去でき、早期発見が改善の「鍵」であることがわかった。

認知症予防の3原則は《①運動し、趣味を持つこと。②栄養面での注意(後述)。③ストレス解消》だという。とりわけ食事・栄養に関しては、【①塩分は摂りすぎない、②カロリー控えめ、③肉より魚(低脂肪・魚油)、④新鮮野菜・果物(ビタミンC)、⑤黄緑色野菜・海藻(βカロテン、葉酸)、⑥小魚(いりこ)・牛乳(カルシウム)、⑦ナッツ・ごま・魚卵(ビタミンE)、⑧酒はほどほどに、⑨タバコはやめたほうがいい】などの原則を守ってくださいーという「処方箋」を、講演の最後に、田平氏からいただきました。(文責・長谷川)

たびらたけし プロフィール：1945年生まれ。

順天堂大学大学院医学研究科、認知症診断・予防・治療学講座 客員教授。岐阜河村病院認知症診断・予防・治療センター長。著書に『アルツハイマー病に克つ』(朝日新書)、『かかりつけ医のための認知症診療テキスト』(診断と治療社)など。



ふるさと巡り IN 東京

へるん先生と漱石先生のお墓(雑司ヶ谷霊園)

「TSUNAMI」という世界共通語を初めて日本から発信したのは、実はへるん先生である。松江に1年3カ月滞在した後、熊本で3年を過ごし、その後神戸に移り住み、『神戸クロニクル』という英字新聞社の論説担当に就任して2年後の1896年(明治29年)、明治三陸沖地震が起きた。各地の惨状を電話・電報で受け、世界に発信している。そのときハーンは、42年前に起きた安政南海地震のときの濱口梧陵のエピソードを思い出した。

安政南海地震が起きたとき、稲むらを焼き払って危機を伝え、村人を救済した濱口梧陵に、ハーンは深い感銘を受けていたからだ。ハーンはそれを、『日本の心』の掌編「生神様」という作品に仕上げた。この作品は後日、子ども向きに書き改められ、「稲むらの火」と改題されて尋常小学校の国定国語教科書に登場した。

「津波だ」と人々は叫んだ。しかし人々の叫びも、音も、またその音を聴く力も、すべて百雷よりも重い、なんとも名状しがたい衝撃でもって打消された。盛りあがった巨大な波が、轟然たる力をふるって海岸にぶち当たったが、そのために岡という岡を震えが走ったように感ぜられた。……(平川祐弘編「生神様」より)。まさしく東日本大震災を思わせるに十分な表現だ。「生神様」は、『怪談』の他の掌編と同じく、オリジナルな物語を踏まえて、自らの表現で仕上げ、「再話文学」として磨き上げられている。

その後、日本の最高学府・東京帝国大学の教壇に立つことになり、その最初の住まいが、市ヶ谷富久町の借家だった。ハーンは自宅裏庭にある福寺(自證院円融寺)がたいそう気に入

り、鬱蒼とした杉木立を散歩するのが好きだった。ところが福寺の住職が代わり、若い新住職になった途端、老杉は次々伐採された。この乱暴な伐採に耐えられなくなったハーンは、西大久保に引っ越した。

このエピソードは、『怪談』の中の掌編「青柳ものがたり」を思い起こさせる。さむらいの友忠と柳の精である美しい乙女・青柳との恋物語の体裁を採っているが、妻・青柳の死に夫・友忠は出家し、ついに青柳の両親の住まいに残された「三本の柳の切り株」にたどり着く……。この作品も「柳情霊妖」というオリジナルを再話文学に仕上げたものだが、この話はハーンの“アニミズム信仰”が切々と伝わってくる傑作になっている。この西大久保では、ハーンは好んで付近の雑木林を散歩したり、少し離れた雑司ヶ谷の墓地を歩いたという。

7月半ば、曇雨の雑司ヶ谷霊園を、へるん先生のお墓を探して歩き回った。まずはじめに、松山から熊本、そしてハーンの後任として東京帝国大学の教壇に立った夏目漱石先生のお墓に行き着いた。墓名碑には「文献館古道漱石居士」とある。そしてそこからほんの5分ばかり歩いたところに、小泉家のお墓があった。三基あるお墓には左から「小泉セツ之墓」「小泉八雲之墓」「小泉家之墓」と刻まれていた。

(文責・長谷川)



へるん先生のお墓



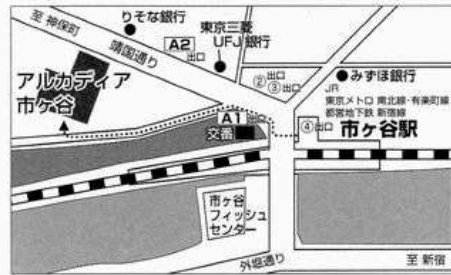
漱石先生のお墓

平成27年度 第60回記念総会開催のご案内

1. 日時 / 平成27年10月17日(土) 12:00~15:30(予定)
2. 会場 / アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL.03-3261-9921(代表)
3. 参加費 / 8,000円(学生無料)
4. 申込 / 平成27年10月2日(金)

講演*命を託す、主治医が見つかる*

★講演者*嵯峨崎泰子(さがさき やすこ) S59年卒・35期、野崎クリニック副院長*日本医療コーディネーター協会代表理事でもある嵯峨崎さんは、患者が望む医療の実現のため、医療側との橋渡し役として幅広く活動されています。最近ではNHK番組にも出演され、その活躍は注目を集めています。



編集後記

雑司ヶ谷霊園の取材には、事務局の中村氏に同道をお願いした。7月は1カ月にわたって、NHK-BSの「100分de名著」で「日本の面影」が取り上げられ、解説には池田雅之氏、朗読には佐野史郎氏が担当していた。同名の「日本の面影」は、作/山田太一、演出/鶴山仁で何度も舞台に掛けられている。市報松江には、「松江の皆さん、こんにちは」というコラムがあり、調布在住の中村氏が、『怪談』の序文で「調布村の農民の伝説」について触れていることを報告している。

長谷川